
週末は女の子。

生成環

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

週末は女の子。

【コード】

N8014B

【作者名】

生成環

【あらすじ】

優子の週末は、いつもの週末とは違った。

週末は女の子。

第1話：放課後の図書室（前書き）

この物語は、『ぼくは女の子？』の続きです。

週末は女の子。

第1話：放課後の図書室

勇樹は、学校の中にある図書室の本の整理してたが、図書室の中には勇樹しかいなかったなかつた。

勇樹はクラスの図書係で、毎週金曜日の放課後は、ほかのクラスの図書係も本の整理をする日と決まっていた。

でも、金曜日の放課後の図書室にあつまる図書係の数が、だんだん来なくなり、そして今日の金曜日、図書室に来たのが勇樹しかいなくなつた。

だから勇樹はたったひとりで、図書室の本の整理をしていた。

勇樹が本の整理をしていると、図書室のドアのあく音がした。

「中原くん、ひとりで整理してるの」

勇樹に話しかけたのは、同じクラスの女の子、菊地可奈きくちかなだった。

「うん、そうなんだ。とうとうぼくひとりだけになったの」

「だって中原くんだけ、毎週マジメに図書室に来ているから、みんな中原くんに押し付けたのよ」

「でもほら、本がボロボロになつたりしたら、ほかに本を借りる人がこまるでしょう。」

それにぼく、本を読むのは好きだから」

「中原くん、ホントに本が好きなのね」

週末は女の子。

「菊地さんは、図書室に何の用事があったの」

「先生に頼まれて、あの本棚にある本を取りにきたの。あら。中原くん髪の毛のぼしてるの」

菊地さんが、勇樹の髪の毛のながいことに気が付いた。

「中原くん、髪をのぼしているから女の子みたいね。中原くんが女装したら、双子の由紀さんよりも、女らしいわ。」

それじゃ、この本かりるね。バイバイ」

菊地可奈が、図書室から出ていってから、図書室にはだれもこなかった。

おおかた、本の整理がおわるころ、下校をつけるチャイムがなった。

勇樹は図書室のカギを閉めて、職員室の先生にカギをわたして学校をでて、家にかえった。

勇樹は、図書室で菊地可奈のなにげない一言に、ドキツとした。

家の中ではいつも女装をして優子という名前でよばれ、妹の由紀には兄としてではなくて由紀の妹となって女の子あつかいされることに、菊地可奈はこのことをどう思うだろうと、勇樹は思っていた。

勇樹が、そんな考えをして家にもどった。

第2話：由紀お姉様からのプレゼント

「ただいま、お母様」

「おかえり優子ちゃん」

「由紀お姉様は」

「まだ帰っていないわ。はやく着替えて、いつしよに夕食の準備をしましうね。優子ちゃん」

「はい由香里お母様」

服を着替えるため、勇樹は部屋へは行っていった。勇樹の部屋は、女の子になってからさま変わりした。部屋の壁紙はピンク色で、からだの全身がみえる鏡があった。

勇樹は、タンスから服を選んだ。

勇樹の選んだ服は、薄いブルー色のブラウスで、赤と黄色のチェックのついたスカートだった。

勇樹は着ている服をぬいだ。勇樹の下着は女の子の下着をはいていた。

いつもはいているのは女の子の下着で、体育の授業のある日しか男の子の下着をはかなくなった。女の子の下着を着ていると、男の子としての生活はとても不便だった。

それは、トイレで立って足すことができなくて座って用を足すクセがついた。

女の子の服を着替えると、勇樹は優子になった。

週末は女の子。

「その服可愛いわよ。優子ちゃん」

「ホント由香里お母様。わたしうれしいわ」

優子は壁にかかっていたエプロンをつけた。

そのエプロンは、赤色のフリルのついた可愛いエプロンだった。

「優子ちゃんが手伝ってくれて、本当にたすかるわ」

「そんな、由香里お母様。わたし恥ずかしいわ」

そう言われて、優子の頬は赤くなった。

「そういう恥じらいをみせる優子ちゃんは、女の子っぽくて可愛いわ。」

次は、この包丁でむいたジャガ芋を洗って、お鍋にいれてね」

由香里は息子の勇樹が女の子になった優子と、毎日いっしょに夕食をつくるようになった。夕食をつくり終わろうとしたとき、玄関のチャイムの音がした。

「あら、由紀が帰ってきたみたいね。」

優子ちゃん。由紀に夕食かお風呂か、どっちか先か聞いてきて」

優子は、玄関に向かっていった。

「ただいま優子」

「由紀お姉様、おかえりなさい。」

由香里お母様から夕食を食べるのか、お風呂に入るのか聞きに来たの。

週末は女の子。

どっちを先にしますか、由紀お姉様」

「先にお風呂に入るで、ママにいつておいて。そうそう、これ優子にあげるわ」

由紀が優子にわたしたのは、カラーリップだった。

「まちがって買ったのだけど、これ優子に似合うからつけてあげる」

由紀は、優子のクチビルにリップをつけた。リップをつけた優子のクチビルは、優子をより女の子っぽくなった。

「やっぱり、そのカラーリップが優子に似合うわ」

「ありがとう由紀お姉様。わたし大切につかうわ、このカラーリップ。由香里お母様が見たら、どういった反応をするか、たのしみだわ」

優子は台所にもどっていった。

優子の顔を見て、由香里はこういった。

「優子ちゃんどうしたのそのクチビル」

「由紀お姉様にいただいたカラーリップで、クチビルに付けてくれたの」

「そうなの。優子ちゃんとても可愛いわ。

由紀に感謝しなくてはね。由紀はどっちを先にするっていったの」

「お風呂を先にはいるって由紀お姉様はいつてましたわよ。由香里お母様」

週末は女の子。

「お風呂から出てきても、夕食の準備がもうすこしかかるから、あとから優子ちゃんもお風呂にはいったらいいわ」

「わかりましたわ、由香里お母様」

風呂からでてきた由紀は、由香里が夕食の準備をしている台所に入っていた。

「ママ、今日のオカズはなに。」

ハンバーグと鳥のから揚げか。ひとつちょうだいね」

「由紀たらつまみ食いなんかして、女の子らしくないんだから。優子ちゃんのほうが女の子らしいわよ。」

でも、あのカラーリップ本当は間違えて買ったのでなくて優子ちゃんのために買ってきたのね」

「なぜわかったの」

「由紀はリップをつけた所なんか見たことないわ。だから間違って買ったなんてウソについて、優子ちゃんのためにカラーリップをかうなんて妹思いなのね」

「別に優子のために買ったわけじゃないもん」

「ハイハイ、由紀がそう言うならそうしとくわ。」

もうすぐ優子ちゃんがお風呂からあがるから、夕食を食べに行きましようね」

二人は台所を出て、夕食のある部屋に向かった。

第3話：明日は美容院。

お風呂からあがった優子は、パジャマを着ていた。このパジャマは由香里が選んだパジャマで、優子のお気に入りのパジャマだった。夕食の準備ができた部屋にはいると、由香里と由紀がまっていた。

「おそくなってゴメンなさい由香里お母様、由紀お姉様」

「わたし達も、いまから夕食を食べようと思ったのよ優子ちゃん。あら、またそのパジャマを着てきたのね」

「だって、由香里お母様はじめて選んでくれたパジャマだから、わたしうれしくって」

「カラーリップをぬり直したのね優子」

「由紀お姉様にはじめていただいたカラーリップだから、またぬってきたの。」

「やっぱり、おかしいかしら」

「おかしくなんかいいわよ優子ちゃん。」

「とてもお似合いだね。さあ、夕食を食べましょう」

優子は席に着いて夕食をたべた。

夕食を食べ終わろうとしようとしたとき、由香里は優子の顔をみてこういった。

「優子ちゃんの髪の毛のびてきたわね。あした髪を切りに行きましょうか」

週末は女の子。

「でもママ、あそこの散髪屋だと、土日は混むでしょう」

「その心配はないわ由紀。あしたは優子ちゃんの美容院デビューの日だから。」

「だから明日楽しみにしてね」

「本当に明日、美容院で髪を切るの。由香里お母様」

「よかったね優子。」

「でもママ、どこの美容院なの。予約はとっているの」

「心配しなくても大丈夫よ。ちゃんと予約は入れてあるわ」

「どうやって美容院へ行くのだろうと優子は考えた。」

「女の子の服を着て家の外へ出ていくのだろうか。」

「その姿を知り合いにでも見られたりしたらどうしよう」と、優子は思った。

「美容院はクルマで行くから心配いらなは優子ちゃん」

「由香里がそう答えたので、優子の心配事は消えうせた。」

「だから明日は由紀もいっしょに美容院に行くから、妹の優子ちゃんのサポートをたのむわよ」

「わかったはママまかしといて。」

「どうしたの優子、なに泣いてるの」

「だって、はじめて美容院で髪を切るのがうれしくて、わたしナミダがでてきたの。由紀お姉様」

「明日が楽しみはね優子ちゃん」

週末は女の子。

「はい由香里お母様」

優子は食べ終わった夕食の後片付けをしに、食器を台所に持っていた。

「後は由紀といっしょに食器を洗うから、優子ちゃんは自分の部屋にもどりなさい」

「なんでわたしも台所に行くのママ」

「由紀がつまみ食いをしたバツよ」

由紀は食器を持って、台所に向かった。

部屋に戻った優子は、美容院でどういった髪型をされるのか、今から待ち遠しかった。

週末は女の子。

第4話：土曜日の朝

土曜日の朝、優子はいつもよりはやく目が覚めた。今日は美容院で髪を切ってもらった日だった。

優子は台所に行くと、由香里は朝食のパンを焼いていた。

「おはよう優子ちゃん」

「由香里お母様おはようございます」

「美容院に行くのがうれしいのね」

「そうなのよ。わたし今日という日がうれしくて、いつもよりはやく起きたの。午後から美容院に行くのね由香里お母様」

「そうよ。優子ちゃんがこんなによろこぶなんてうれしいわ。

これから一緒に朝食の準備をしない」

「もちろんよ。わたしサラダを作るわね」

「いつもありがとう優子ちゃん。」

優子ちゃんは本当に女の子よ。この前までは勇樹という名前の女の子だったのにな」

「もう由香里お母様たら、家の中では女の子で外ではまだ男の子なのよ。」

このサラダの盛りつけこれでいいかしら」

「あら話をこまかして。」

週末は女の子。

でも今日は一日中女の子だから、美容院でもっと可愛い女の子にしてみらおうね」

由香里にそういわれて、優子は恥じらいの表情を見せた。

朝食の準備が出来たころになって、寝起きの由紀が台所に入ってきた。

「おはようママ。優子もおはよう」

「由紀お姉様おはようございます」

「朝食の準備が出来たから、顔をあらったてらっしゃい」

由紀が顔をあらっている間に、優子は朝食を運びテーブルの上に置いた。

由紀は優子の顔を見た。優子の顔はうれしそうに笑っているのだった。

「優子は、美容院に行くのが待ち遠しいのね」

「そうよ、優子ちゃんは朝からそうなのよ。」

うれしくて仕方がないのよ」

二人はそういって優子の顔を見たのだった。

朝食を食べ終わって、優子は美容院に出かける服をえらんでいて、服を着たのがもうすぐ美容院に出かける時間だった。

優子は急いで部屋を出た。

週末は女の子。

週末は女の子。

「遅いよ優子。でもその服なかなかいいじゃない」

「本当、由紀お姉様。やっぱりこの服を選んでよかったわ」

「二人とも早くクルマに乗りなさい。でも、由紀はその服でいいの」

「これでいいのよ。今日の主役は優子なんだから」

「そうよね。今日は優子ちゃんのための日だから。
忘れ物ないわね」

由香里は美容院へ向かった。

第5話：美容院のミス

美容院に着いたのは、予約の時間よりも10分はやかっただ。

「いらっしやっませ」

「予約をした中原ですけど」

「お待ちしております。どうぞこちらへ」

案内をうけて連れて行かれたのは、個室だった。

「この美容院は全店個室となっております。」

もう一度名前の確認をさせていただきます。

中原由香里様。次に中原由紀様、妹の中原優子様の三名様でございますね。

それではお待ち下さい」

優子たちが中に入ると、そこに誰か座っていた。

由香里は美容院の店員にいった。

「あの席に座っている女の子は誰です」

「少々お待ち下さい」

美容院の店員はどこかへいった。

由紀が部屋の中をのぞくと中の女の子が気が付いた。

「あら、由紀じゃない」

由紀に声をかけたのは菊地可奈だった。

週末は女の子。

「どうして可奈がここにいるの」

「ここはわたしがいつも利用する美容院よ。でも、由紀の下に妹がいたの初耳だったよ」

「本当の妹じゃないけどね」

可奈は、由紀の妹の顔を見て驚いた。それは可奈の知っている顔だった。

「勇樹くん。勇樹くんなの」

「そうよお兄ちゃんの勇樹よ。でも今はわたしの妹で名前は優子よ。優子アイサツはどうしたの」

そう言われて、優子は同じクラスの可奈にアイサツをした。

「こんにちは、由紀の妹で優子です」

優子の声はかすかに震えていた。女の子としてはじめて家の外へ出て、いきなり同じクラスの菊地可奈にあうとは思わなかった。

「なんて愛らしいの勇樹くん。でも今は女の子だから優子さんね」

その時、美容院の店員と店長が戻ってきた。

「どうもすみません中原様。こちらのミスであちらの菊地様と同じ部屋になりました。」

中原様は後1時間ほど待ってもらっては「

週末は女の子。

「わたしは構わないわ」

「ですが菊地様が迷惑じゃないのでしょうか」

「由紀はサッカークラブの仲間で、優子はクラスが一緒だから構わないわ」

「そうでございますか。私どものミスで、そういつていただき助かります」

美容院の店長は、菊地可奈に平謝りをした。

「それでは、最初は菊地様と中原由紀様から先にしますので、優子様はあちらのお部屋でお待ちになればいかがでしょうか」

美容院の店長は、優子を部屋に案内した。

部屋の中では由香里が、少し怒った声で店長に問い詰めた。

「どう言つことなの。ここの美容院は人気があると聞いてここに来たのよ。」

とくに優子ちゃんは、はじめての美容院なのよ」

「申し訳ありません。そのかわり優子様にはこういったサービスは如何でしょうか」

店長は、由香里にサービスの説明をした。

説明を聞いて由香里は納得の表情を見せた。

「では優子ちゃんには、このサービスを全部お願いしますわ」

週末は女の子。

「でも、それでは由紀様のサービスが」

「由紀の髪の毛の長さは、サッカーの邪魔にならないぐらいの長さでいいわ。」

そのかわり優子ちゃんを可愛い女の子にお願いね。

それから、優子ちゃんに合う長い髪の毛のかつらをいただきたいのですが」

店長は由香里に言われて、部屋を後にした。

週末は女の子。

第6話：写真撮影

「中原優子様。カットの用意ができました」

美容院の店員がドアを開けて、優子は部屋から出ていった。優子と入れ替わりに、由紀と可奈が部屋に入った。

「由紀は終わったのね。」

アラ、あなたはだれ」

「はじめまして。わたしは由紀さんと同じサッカークラブで、優子さんとクラスがいつしよの菊地可奈です」

「菊地さんは、優子ちゃんが誰か知っているのね」

「大丈夫よママ。」

可奈はこのことを誰にも話さないわ」

「由紀さんの申すように、優子さんの事は言いませんは叔母さま」

可奈は由香里に話さないと約束をした。

「菊地さんは優子ちゃんを見た感想は」

「優子さんを見て、だれも男の子だとは見えませんわ。表情やしぐさは女の子でした」

「そういつてもらうと優子ちゃんよろこぶわ。でもあなた達も、もう少し女の子らしくしたほうがいいわ」

週末は女の子。

「だから妹の優子が女の子らしいでしょう」

由紀は由香里にそう答えた。たしかに妹の優子が女の子っぽいと可奈は思った。

「ねえ由紀、わたし達四年生になったら、学校のクラブ活動をはじめなきゃイケないよね」

「なによ急に話を変えて」

「由紀はサッカーをするのでしょうか」

「ママ、学校ではクラブ活動でサッカーをしないわ。だってつまらないもの」

「わたしもそうよ。たしかにあの人達はサッカーがヘタだし、オフサイドのルールも知らなそうよね」

可奈も由紀の意見に賛成のようだった。「でも、クラブは絶対に入らないといけないでしょう」

「大丈夫よ可奈。そんなにうるさくないってクラブの先輩も言ってたわ」

それから由紀たちは、昨日テレビで見たサッカーの試合の話をしていった。

美容院の店員が来て、優子が終わった事を由香里に教えた。由香里達が部屋の中にいた優子を見て、目が丸くなった。それは深窓のお嬢さま風のドレスを着た優子だった。

「由香里お母様、わたしキレイかしら」

週末は女の子。

「とてもキレイよ優子ちゃん」

「わたしと同じ双子なの」

「クラスの中で1番キレイじゃないの」

「いかがでしょうか。私達も、これほど優子様が変わると思いませんでした」

美容院の店長はいった。

「優子様のお写真を撮りたいのですが」

「わたしもこの美容院に通っているけど、写真を撮られたこと一度もないわ。」

でも優子さんキレイだわ」

美容院の店長は、写真撮影の準備をした。撮影の準備が終わると、店長は優子をカメラの前に立たせた。

写真を撮られているうちに、優子は自然と笑顔が出てくるようになった。

「私も長いこと美容院で写真を撮って来ましたが、優子様の自然と出た笑顔が今までの中で1番でございます」

撮影も終わり、由香里が美容院の会計をすませようとする。店長は、「今日は私達のミスと、優子様をモデルとして撮影したため、由紀様と優子様そして菊地可奈様の料金はいただけません。」

それから、優子様をパネルにした写真を飾りたいのですが」

「飾ってもいいわ。優子ちゃんがモデルになった写真が見られるなんて、最高だわ」

週末は女の子。

美容院を出て、可奈は由香里に礼をした。

「あした、わたしの家に遊びにこない」

「わたしが可奈さんの家に遊びに来てもいいの」

「由紀と一緒に遊びに来てね」

「でも明日はわたし、補欠だけどサッカーの試合に行かなくては
かなきの」

「わたし一人で可奈さんの家に遊びに行かなくてはならないの」

「大丈夫よ優子ちゃん。優子ちゃんはどこから見ても女の子だから
心配しなくてもいいわ」

優子は、喜ぶと不安がいつぱいだった。

週末は女の子。

第7話：はじめてのティーパーティー

日曜日の昼下がりに、可奈が待ち合わせの時間に遅刻しそうだったのでは走ってきた。

可奈が待ち合わせの公園に着いたら、勇樹は公園のベンチに座っていた。

「遅れてゴメン勇樹くん」

「平気でしたわ菊地さん」

可奈は勇樹を見た。勇樹は女の子の服を着ていて、髪型は三つ編みをしていた。そして勇樹の顔は化粧をしていた。

「どうしたの菊地さん」

「負けたわ」

「なにが負けたの」

「だって勇樹くん、わたしより可愛いもの」

「そんな可愛いだなんて」

「それにそのしぐさよ。まるっきり女の子よ」

「ありがとう菊地さん。でも今は女の子だから」

「あっそうか。今は優子さんなのね。じゃ優子さん家に案内するわ」

優子は可奈の家に案内された。

可奈の家は、公園から少し離れたところにあつた。家にたどりつく

週末は女の子。

と、可奈の母親が出迎えてくれた。

「ただいまお母さん」

「おかえり可奈、あなたはたしか」

「はじめまして可奈さんのお母様。中原優子と申します」

「優子さんは、わたしと同じサッカークラブに入っている由紀の妹なのよ」

「由紀お姉様がいつもお世話になっております」

「そんな堅苦しいアイサツは抜きにして、家に案内するね優子さん」

優子は家に入り、可奈の部屋に案内された。でも可奈の部屋も由紀と似た部屋のようだった。

「ごめんなさいね優子さん。可奈の部屋が散らかっていて」

「ひどいお母さん。これでもキレイにしたのよ」

「由紀さんに妹がいてるなんてしらなかったわ。たしか、お兄さんがいたと聞いていたけど。何か飲みものを持ってくるけど」

「あの、わたしプリンをつくってきたの」

「このプリン優子さんがつくったの」

週末は女の子。

「はい。由香里お母様といっしょに、朝からつくっておきましたの。お口にあつかわかりませんけど」

「ありがとうございます、これをみんなでいただきましょう。」

可奈手伝ってちょうだい」

可奈と母親は、いっしょに部屋からでた。

「それにしても優子さんとても女の子らしいわ。」

可奈も見習ったらどうかしら」

優子が男の子と知ったらお、お母さんはどういう顔をするのだろうか
と可奈は思った。

可奈の母親は、天気が良いから外でお茶を飲みましようと言って、
可奈は優子を呼びにさそいに行った。

可奈の母親が、庭でお茶の用意をしていた。

「今日は優子さんが来たから、庭でティーパーティーを開いたわ」

「ありがとうございます」

「でもお母さん、庭でこんな事をするのはじめてだったよね」

「可奈が連れてくる友達はみんながさつなのよ。」

優子さんみたいなおしとやかな女の子を連れて来たら、いつでも開
くわよ」

「優子さんがつくったプリンとてもおいしいよ」

「可奈たら、もっとゆっくり味わったらどうなの」

三人は時間を忘れて、パーティーを満喫したのだった。

週末は女の子。

「こんなパーティーを開いて菊地さんありがとうございます」

「菊地さんだなんて、可奈と呼んでちょうだい。わたし達友達同士でしょ」

可奈に友達と呼ばれて、優子は突然泣きだした。

「どうしたの優子さん」

「だって、わたしの事を友達だと言ってくれたのが、わたしうれしくて」

「そんなに泣いたら、せつかくのお化粧品も台なしだわ」

「わたしの部屋で化粧をなおしたらいいわ。行こう優子さん」

可奈は、優子の手をとって部屋に入った。

優子が化粧をなおしているとき、可奈はカラーリップが目に入った。それは、ドラッグストアで由紀といっしょに買い物をしたとき、由紀がキレイなカラーリップを買ったので訳を聞くと、優子のプレゼントだと由紀がテレで答えたのを可奈は思いだした。

化粧をなおし終わり、可奈の母親がひとりで帰って大丈夫なのと心配そうにいうと、

「公園で由紀と待ち合わせしているから心配しないで。じゃ優子さん行きましょ」

優子は可奈の家を後にした。公園には由紀が待っていた。

「二人とも遅い」

週末は女の子。

「ゴメン由紀、優子さんと話に夢中になって」

「わたしも可奈さんといっしょにいて楽しかったですわ」

「二人ともいつのまに、こんなに仲良くなったのね」

優子と可奈はおたがいの顔を見て笑みを見せた。それは新しい二人の友情のはじまりだった。

「明日学校で会いましょう可奈さん」

「ええ優子さん。でも明日会うのは勇樹くんなのね。じゃ次は優子さんの家に遊びに行くから約束よ」

優子と別れた後、可奈は帰ったら母親を喜ばすためにお手伝いしてをなるべくしようと思った。

第8話：新しいお姉様。

月曜日になっても優子はクラスに現れなかった。

担任の先生が風邪のためだと告げたが、可奈は昼休みに、本当の理由を由紀に聞きにきた。

「今日優子さん休んでいるけど、昨日何かあったの」

「言いにくい事なんだけど、昨日の帰り道にね」

「優子さんに何か起こったの」

「知らない男に、抱き付かれたのよ」

「優子さんが」

「そう優子が。それにあの男優子にひどい事をいったの。」

「優子の身体をさわりまくったあげく、『なんだ男か』といって、男は優子を倒して逃げたの。」

「優子の顔は真っ青になって、身体が震え上がっていたのよ」

「よほど怖かったのね」

「そのことが原因で学校を休んだのよ」

可奈は、優子がそんな目にあつた事が心配でならなかった。学校が終わったら、優子の見舞いに行くと由紀に言った。

「それは優子も少しは元気になると思っわ」

週末は女の子。

由紀は可奈の心遣いに感謝した。
放課後、可奈は由紀の家に行くことにした。由紀の家に着くと、可奈は優子の部屋に入った。

「優子、可奈が心配してくれて家に来てくれたわ」

「大丈夫だったの優子」

優子は二人の顔を見て、突然こう言った。

「わたし女の子よね」

「そうよ、優子は女の子よ」

「本当、由紀お姉様」

「そうよ。優子さんは女の子よ」

「ありがとう可奈さん」

優子は二人にそう言われてうれしいそうに笑顔を見せた。

由紀は、優子の笑顔を見ておもわずこう言った。

「わたしの事も可奈お姉様と言ってくれる。

だって、優子の笑顔とても可愛いからわたしの妹になってくれないかしら」

「可奈さんがわたしのお姉様になってくれて、うれしいわ。

わたしに二人のお姉様が出来て、とてもシワアセ」

「四年生になったらわたし達、家庭科部に入らない」と可奈は言っ

週末は女の子。

た。

「だって由紀もわたしも女の子らしくないでしょ」

「この三人の中では優子が一番女の子らしいよね」

「由紀お姉様。わたし恥ずかしい」

「わたしも、妹の優子が女の子らしいわ」

「可奈お姉様まで」

二人のお姉様にそう言われて、優子の頬は夕日のように赤く染まった。

週末は女の子。

第8話：新しいお姉様。（後書き）

「週末は女の子。」はこれで終わりですが、次の話で優子ちゃんがみんなから女の子として扱われます。どうなって扱われるのかは愉しみにしてください。読んでくれてありがとうございます。

週末は女の子。

週末は女の子。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8014b/>

週末は女の子。

2008年11月7日09時03分発行